森鴎外

岩がのように立っている。登山をする人が、初めてミヤマウスユキソウの白い花を見つけて喜ぶのは、ここの谷間である。フランツはいつもここへ来てハルローと呼ぶ。

　麻のようなブロンドな頭を振り立って、どうかしたらローマ法皇の宮廷へでも生けられていきそうな高音でハルローと呼ぶのである。

　呼んでしまってじいっとして待っている。

しばらくすると、大きい鈍いコントルバスのような声でハルローと答える。

これがである。

フランツはなんにも知らない。ただ暖かい野の朝、ヒバリが飛び立って鳴くように、冷たい草むらの夕べ、コオロギがびやかに鳴くように、ここへ来てハルローと呼ぶのである。しかしの答えてくれるのがうれしい。に答えてもらうために呼ぶのではない。呼べば答えるのが当たり前である。日の明るく照っているところに立っていれば、影が地に落ちる。地に影を落とすために立っているのではない。立っていれば影が差すのが当たり前である。そしてその当たり前のことがうれしいのである。

－13－